

おと さだ  
**乙 貞**

第250号 通巻43第5号  
令和5（2023）年12月1日発行

守山市立埋蔵文化財センター  
〒524-0212 守山市服部町2250番地

TEL&Fax 077（585）4397  
Mail maizobunkazai@city.moriyama.lg.jp

早12月、今月25日はクリスマス、キリスト教徒ならずとも、クリスマスケーキやプレゼントに嬉々とされた方も多いのではないのでしょうか。世界中でイエス・キリストの降誕を記念する催し物が繰り広げられるこの日、故高橋正隆さんの「下之郷の歴史」には、大將軍講という見出しで、「12月25日はクリスマスに翻弄され、忘却されてはいるが、道祖神の大將軍をお祀りする日であった」と書き記されています。

陰陽道の方位神・八將軍のひとりである大將軍と疫病や災いからムラを守る道祖神とが融合し、邪霊の侵入を防ぐ神、道祖神の大將軍として、講が組織されるなど信仰を集めていたとされています。下之郷では、お祀りの年中行事日がクリスマスという世界的ビッグイベントに凌駕されたと言えなくもありません。

先月、休日を享受した文化の日や勤労感謝の日も戦前の明治節、新嘗祭が意図的に上書きされた祝日で、更には主権国家でありながら、建国を祝う祝日が戦後長らく廃止されたことなど、その時折の年中行事は政治文化や社会情勢によってアップデートを繰り返し、新鮮さを損なわない歳時を醸成しているのでしょう。

それでは、前号以降の発掘調査成果と開催イベントについて掲載します。

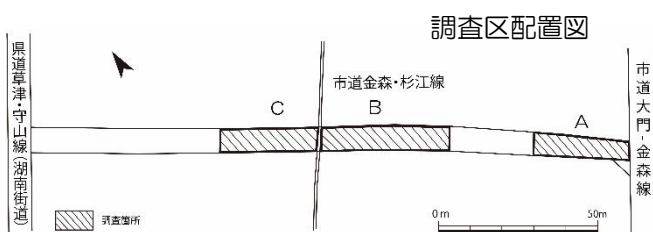
## 発掘調査だより

### 金森西遺跡第6次調査の成果

金森西遺跡第6次調査は、金森町地先の県道草津-守山線とその南側を並走する市道大門-金森線に交差する市道金森-杉江線の拡幅工事に先立ち、10月2日より実施しています。

まず、試掘調査の結果から、全長約200mの範囲において埋蔵文化財の包蔵が確認された調査対象箇所にA～Cの3調査区を設けて、調査を行いました。

11月末現在、調査も終盤を迎え、調査区域全域の遺構を把握していますが、ここでは概要を報告します。調査は、北西側のC区からB→A区の順に行った結果、C区では竪穴建物1棟と溝、柱穴を、B区でも竪穴建物1棟と大溝を検出しています。



市道大門-金森線に隣接するA区でも竪穴建物2棟の他にピットを検出しました。今回の調査で検出した竪穴建物4棟の規模はいずれも約5m四方ほどで、庄内式併行期（弥生時代終末）の時期が考えられます。

金森西遺跡ではこれまで5地点で発掘調査が実施されていますが、中でも、今回の調査地の至近で昭和52年（1977）から実施された県道草津-守山線（湖南街道）建設工事に先立つ調査やこの道路の改修工事が平成23、27年に実施されていて、古墳時代前期から鎌倉時代に及ぶ遺構遺物を検出しています。今回の6次調査もおおよそ既往調査を追認する成果を挙げたと言えます。

また、調査出土品ではありませんが、最初の調査地近隣地での水路工事の際に滑石製模造鏡が、さら遺跡内の水田からは壺に納められた小型重圈文鏡が見つかっています。いずれも古墳時代の水にまつわる祭祀具と考えられていて、今回の調査成果をまとめる際の参考資料になります。



C区検出遺構写真



また、調査とは関係がないことですが、今回の調査地となったこの道路は、守山市内にあっても最も古い道のひとつと考えられる「馬街道」筋になります。金森町で志那街道と分岐して、湖岸の杉江浦まで条里方向に直線的に伸びる道で、水陸交通を結節する杉江浦（赤野井港）にまで、貢米などの物資を運ぶ牛馬が列をなしていた光景から「馬街道」と呼ばれるようになったと伝えられています。

この道の歴史は古く、律令時代につくられた人工道路と考えられています。

馬街道と交差する県道草津-守山線（湖南街道）は昭和の時代に建設された新道で、新旧の道路が交差し、新たな守山市が形成されています。

調査は12月初旬には終了する見通しです。次号の乙貞では、既往調査成果も視野に入れて、今回の調査のまとめを報告します。（沖田）

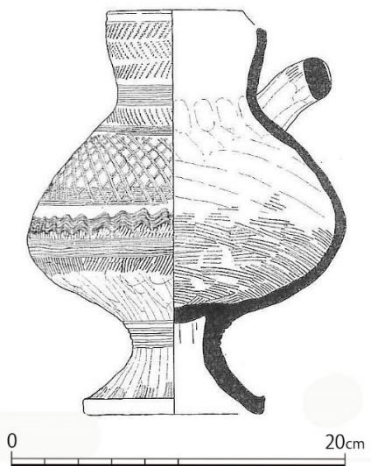
…秋季特別展から…

前号に引き続き、開催中の秋季特別展の展示品を紹介します。

弥生時代に使われた土器には、壺や甕のように姿かたちを変えながらもずっと使われ続けた長寿の土器と、その一方で一時期だけ用いられた土器が見られます。弥生時代中期末の水差し形土器や弥生時代後期から古墳時代初めにかけての手焙り形土器がそのよい例になります。

水差し形土器は水物容器で、図のように下膨れした壺形体部に把手を具備し、その多くは脚台がつきます。把手のついた反対側が注口となり、把手側の口縁は注ぎやすくするために口縁に親指をそえるように凹状に窪ませています。

水差し形土器はどれも装飾性が高く、器全体を凹線文や櫛描き文で飾っています。日常生活での使用頻度は高くなかったようで集落



服部遺跡出土の水差し形土器



水差し形土器の使われ方（想像）

からの出土は多くはないのですが、方形周溝墓からは供献土器として、壺とともに多数出土しています。

魏志倭人伝に、「主哭泣 他人就歌舞飲酒」というくだりがあります。喪主が悲しさのあまり泣き叫ぶ中、葬儀に集まった人たちは酒を飲んで歌い踊っている様子がうかがえます。

水差し形土器は、葬送に際しての飲酒に用いられ、そのまま死者に手向けられたのかもしれませんが。

## トピックス topics トピックス topics トピックス topics トピックス topics

### 10月歴史入門講座第5講・11月秋季講演会を開催しました

秋季特別展を開催して以降、歴史入門講座第5講と秋季講演会を開催しました。

まず、10月21日（土）に開催した歴史入門講座第5講は、宮崎幹也さん（元米原市教育部理事）に「墓から見た弥生社会の構造変化」というテーマで講演していただきました。

宮崎さんは、縄文時代と弥生時代の文化の違いを整理されたうえで、弥生社会を形成する集落・水田・墓域のうち、弥生時代のスタンダードな墓である方形周溝墓の発掘調査成果をもとに、稲作農耕の発達に伴い、社会構造がどのように変容していったかをわかりやすくお話していただきました。

11月18日（土）には、秋季講演会を開催しました。講師は、考古学界の牽引者のひとり、森岡秀人さん（橿原考古学研究所共同研究員）で、「近畿弥生社会から見た下之郷遺跡・伊勢遺跡」の演題で講演していただきました。

森岡さんは、考古学界における第一人者であると同時に、守山

市においては、下之郷、伊勢両史跡の保存整備活用委員会委員として、助言や指導をいただいております。守山の弥生遺跡を最も熟知されている研究者です。

今回は、近畿の弥生遺跡を俯瞰したうえで、下之郷遺跡と伊勢遺跡を例にした中期から後期へと転換する弥生社会についてお話ししていただきました。

講演では、下之郷遺跡の特質を弥生時代中期後半の近畿弥生社会に通有するものとし、「下之郷期」、同様に後期を「伊勢期」と、森



秋季講演会講演風景

岡さんならではの類型化した表現によってわかりやすく受講することができました。

宮崎さん、森岡さん、ご講演ありがとうございました。

なお、秋季講演会も多くの受講希望者があり、早々と定員に達しました。多数の方にお断りしましたことを紙面でお詫びいたします。講演会資料につきましては受講者以外にも配布いたしますので、希望される方は埋蔵文化財センターまでご連絡ください。



第5講開催風景



秋季講演会受講風景

## 埋蔵文化財センター友の会 第3回見学会を開催しました



船形埴輪（宝塚一号墳出土）悪天候で危ぶまれていた宝塚一号墳の現地見学も実地することができました。

行楽の秋に相應しい天候になったことや、8月上旬開催の第2回見学会から3カ月あまり空いたこともあり、33名の参加者は今回の見学会を満喫していました。

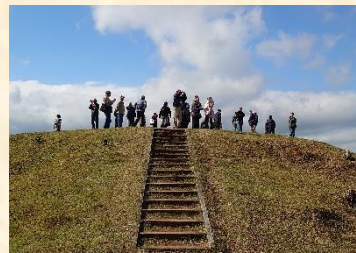
多忙の中、丁寧な説明と対応をしていただきました松阪市文化財センター、および津市埋蔵文化財センターの職員の皆さん、ありがとうございました。お礼申し上げます。

11月17日（金）には、埋蔵文化財センター友の会第3回見学会が開催されました。今回の見学先は三重県松阪市と津市で、午前中は松阪市の嬉野考古館、松阪市文化財センター、宝塚古墳公園、午後から津市埋蔵文化財センターを訪れました。

朝、守山を発つときは雨が降りしきる悪天候でしたが、現地到着時には、雨はあがり、次第に晴れ間が広がっていく見学日和となり、



松阪市文化財センター見学風景／宝塚1号墳現地見学風景



津市埋蔵文化財センター見学風景／昼食メニュー

これまでの乙貞や新着情報は、『歴史のまち守山』や Face Book からもご覧いただけます！



←歴史のまち守山はコチラから  
<http://moriyama-bunkazai.org>

守山市立埋蔵文化財センターFacebook ページはコチラから▶  
<https://www.facebook.com/MaibunMoriyama/?ref=bookmarks>



【後記】滋賀県をこよなく愛した作家の一人、司馬遼太郎さんの「街道をゆく24」所収の近江散歩の冒頭は、幼少の頃に、高天原は近江であると書かれた古ぼけた本を読んだことの回想から始まります。大阪湾の葦の原で稲作を生業とした弥生人が淀川水系を遡った先で、琵琶湖と広大な土地を目の当たりにする。ここが彼の高天原だとする筋立てを鮮明に記憶していると語っています。

高天原とは神々の住む天上界で、死者の住まう地界の黄泉国と、その中間に人々の実世界である葦原中国という現実世界があり、日本神話はこの3空間を舞台に語られています。琵琶湖の標高は85m台、およそ大阪城天守閣の高さで天上界に着いたことになりすし、日本神話の世界観と弥生人のマッチングを一笑に付していますが、淀川の水源地に広がる絶景を高天原とした弥生人の錯覚とは、司馬さんの近江、滋賀に対する憧憬の仮想体験ではなかったかと想像しています。

さて、この弥生人の後日談を勝手に創作すると、大阪に引き返すことなく、琵琶湖岸のほとりに定着し、ここでも稲作を始めたのではないのでしょうか。滋賀県で稲作が始まった最古の遺跡のひとつに、琵琶湖博物館近くに広がる烏丸崎遺跡があります。服部遺跡の水田跡はおそらく次のステージになりますが、この烏丸崎遺跡では、稲作が始まった頃の土器の中に生駒山麓の土で焼かれた特徴的な土器が出土しています。司馬遼太郎さんの脳裏に焼きついた幼き日の記憶、野洲川を天の安河に比定した「高天原近江説」はともかくも、稲作の東漸については、一旦大阪湾岸に定着後、淀川水系を遡り近江にもたらされたことは、嘘から出た誠ではありませんが、稲作の伝播という点では案外、的を得ているかもしれません。  
(馬耳東風)